

東電、国会事故調にウソ

福島1号機内部「真っ暗」

東京電力が昨年2月、福島第一原発1号機の現地調査を決めた国会事故調査委員会に、原子炉が入る建物の内部は明かりが差し、照明も使えるのに、「真っ暗」と虚偽の説明をしていたことがわかった。国会事故調は重要機器の非常用復水器が、東電の主張と違って地震直後に壊れた可能性があるとして確かめるつもりだったが、この説明で調査を断念した。

▼2面11危険強調1時間

現地入り断念招く

国会事故調は解散しているが、現地調査の責任者だった田中三彦元委員（元原子炉設計技術者）は東電の虚偽説明で調査を妨害されたとして7日にも、衆参両院議長に非常用復水器の調査実施を申し入れる方針。

国会事故調は、2011年3月11日の地震発生直後に1号機原子炉建屋の4階で「出水があった」との目

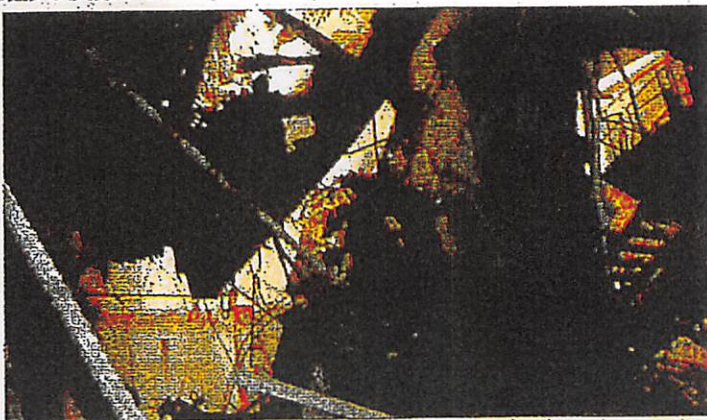
撃証言を複数の下請け会社の労働者から得た。

4階には水の入った非常用復水器のタンク2基と配管があるため、地震の揺れで非常用復水器が壊れた可能性があるととして4階部分の調査を決めた。

これに対して東電は、昨年2月28日午後7時ごろ、

玉井俊光企画部部長（当時）らが衆議院第2別館を訪問。

非常用復水器のある4階も、自然光が差し込んで明るい。東電はこの映像はカバー設置前に撮影したものとして説明していたが、実は設置4日後の撮影だった—東電撮影の映像から



差し込む自然光

田中元委員らに、ところどころ明かりの差す4階の映像を見せながら、この

映像の撮影時は、原子炉建屋に放射性物質の拡散を防ぐカバーをかける前だった

ので明るさがあると説明。そのうえで「今は真っ暗だ」「照明もついておりません」と話した。

田中元委員は最終的にこの「今は真っ暗」を理由に調査を断念した。

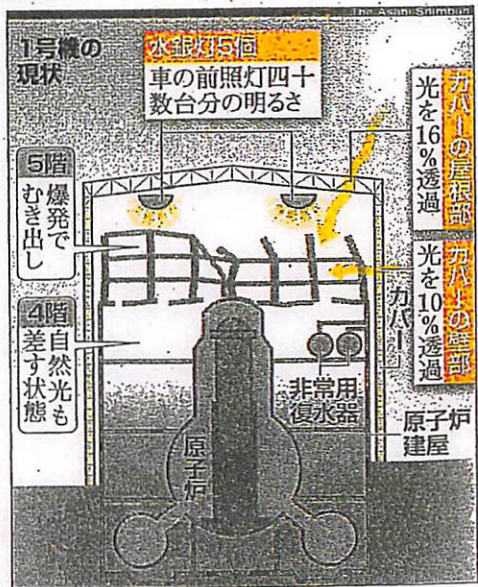
ところが、実際は、映像の撮影日はカバーをかけた4日後だった。カバーは太陽光を10〜16%通すので、物を搬入する穴があり、天井が爆発で破損している4階に明かりが差しこんでいた。

さらにカバー内側の天井には強力な水銀灯が取り付けられ、11年10月28日から使用可能になっており真っ暗になり得ないのに真っ暗と虚偽の説明をした。

東電広報部は説明に誤りがあったと認めたらうえて、

「何らかの意図を持って虚偽の報告をしたわけではない」と話している。

非常用復水器は、交流電源を失っても蒸気力で原子炉に水を入れ、冷やす重要装置。地震で壊れていたとなれば耐震基準を強化する必要が出て、再稼働問題にも影響を及ぼす。



デジタル版に虚偽説明の音声 (木村英昭)